

MDP

Sagantosu

MATCHDAY PROGRAM

8.31 (土)

FW 32

堺屋 佳介

Keisuke SAKAIYA

19:00 KICK OFF
vs 湘南ベルマーレ

©1993 SHOHAN BELLMARE CO., LTD.

追

「自分たちが先輩たちを逆に引っ張っていくくらいじゃないとチームは変わっていかないぞ。自分たちがこのチームを変えていってくれ」。8月初旬、新たに監督に就任することになった木谷公亮監督はアカデミー出身選手たちを集めて熱く、言葉を投げかけたという。それを聞いた堺屋佳介の心には熱い炎が宿った。「僕はこのチームのアカデミー出身でこのクラブへの思い入れもある。J1に残留させるという気持ちは強いですし、監督からああいうふうに伝えられてチームに対する責任感はさらに強くなりました」。12歳のころから背負い続けてきた鳥栖のエンブレム。当然のことながら日本最高峰の舞台であるJ1で戦う鳥栖の姿が堺屋は知らない。数多くの先輩たちが紡いできた歴史と伝統を守るために年齢は関係ない。木谷監督も残留争いという過酷な状況を戦っているからこそ、年齢に関係なく、クラブへの思いが強い堺屋たちにチームの先頭に立つことを求めている。

アカデミー時代はさまざまなポジションで高い質のプレーを担保できるマルチプレイヤーだったが、トップチームに昇格してもサイドバック、ウイングと複数のポジションで活躍を見せている。しかし、チームを浮上させられない現状の前では個人の結果に喜べるはずもない。「もっと1対1のところで自分が勝っていくことでチーム全体の雰囲気上げないといけないし、自分がチームを高めていくくらいの気持ちを見せていかないといけない。それができていないことが本当に悔しい」。木谷監督に掛けられた期待に応えられない現状に悔しさを味わう日々になっているが、それでも堺屋は決して下を向かない。振り返れば、初先発となったG大阪戦では退場という憂き目にあった。それでも、「凹んでもあの瞬間、あの時間は戻ってこないし、自分がこれからどういう風に取り組んでいくか。そっちのほうが大事」と前だけを見てきた。見据えるのは来季もJ1で戦う鳥栖の姿。その実現のために堺屋は絶対にあきらめない。

指揮官に掛けられた言葉を胸に。

鳥栖のエンブレムを背負う責任と覚悟を示す

木村情報技術

